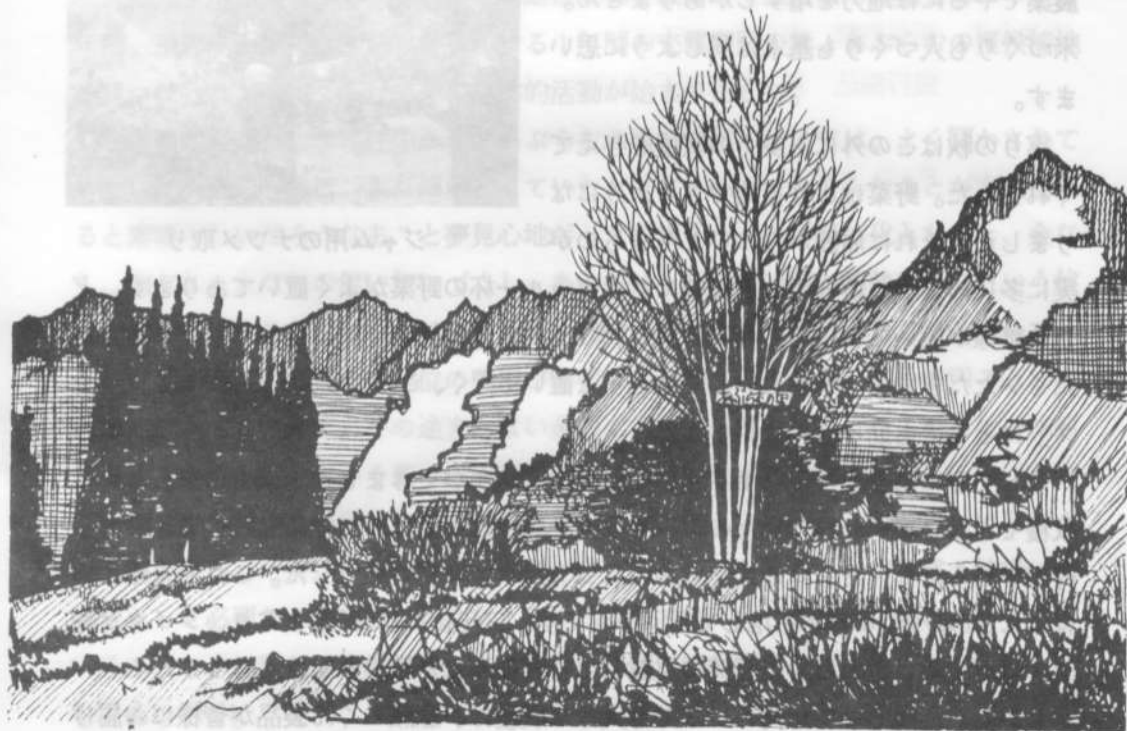


あぶらむ通信

第4号 1988年12月10日 * あぶらむの会発行
〒509-41 岐阜県吉城郡国府町字津江 TEL057772-4219, 3828



「冬を前にしたあぶらむの里敷地」 尾針 明宏 絵

飛驒日より

10月29日、里にも初雪を迎えた飛驒地ですが、それから一ヶ月、外は一面の銀世界、本格的冬の訪れとなりました。今年の冬は厳しい予感がいたします。

あぶらむ通信を手になさっている皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

あぶらむの里で働く私たちも恵みの内に、一同元気に過ごしています。

さて、前号では米の収穫までお伝え致しました。周囲のコンバインなどでの刈り入れを横目で見ながら私たちは鎌を手にしての全くの手作業、人力と機械の差はれき然です。しかし口に入れた時のご飯の味は格別でした。平均的収量からいけば一反五畝もあれば700kgの米はとれるとのことですが、いざフタをあけてみると無農薬の田は「仕干病」にやられ400kgほどしかとれませんでした。その内、地主様に年貢米を120kgさし出さなければなりません。百姓一揆の気持が少しは分かるような気がしました。無農薬でやるには地力を増すしかありません。米づくりも人づくりも基本は同じように思います。

実りの秋はこの外にも多くの収穫を与えてくれました。野菜はほぼ自給できるようになりました。それに周囲からのいただきものが実に多いのです。留守宅の玄関口にダンボール一杯の野菜がよく置いてあります。どこの誰様が置いていってくれたのかは判りません。お礼のいいようがないままありがたくいただきます。名前もいわずにそっと置いて行く、このような「田舎サンタクロス」にとっても助けられています。

そして春に菌子を打ったホダ木にみ厚なシイタケができました。来秋にならないと収穫できないといわれていたのに、もう実をつけはじめたのです。「よっぽど成育条件がいいんだな」とプロの人からいわれて、ニコニコ顔の私でした。これで来年からは年に200本づつホダ木を増して行く予定です。二年後には600本となり、シイタケやナメコが少しはあぶらむの経済に貢献してくれることと思います。

しかし、私にとっては何といても大きな収穫は、念願のくん製品が皆様にお届けできるようになったこと、そして併せて果実ジャムも出来上がった事でした。

ハムやベーコンなどのくん製品は二年前より細々と試みてきました。しかし、フランス料理コックの増山君の参加により、一気に加速され、彼の努力も実りやっとなり製品となりました。この間試作の連続で、我家の食卓は毎日ベーコンばかり、あまりもの食べ過ぎに味の変化が分からなくなってしまいました。他人に食べてもらい「おいし



ジャム用のナツメ取り

い！いけるよ」といわれても中々本気にできず、完成品を目指してつくり続けてきました。味の世界では何が完成品か定かではありません。けれども多くの人々の意見と自分たちなりの手ごたえをもってやっと皆様にお届けする決心に至りました。



出来たジャムのビン詰

また、これに併せて、なつめやリンゴなど季節の果実ジャムもつくるようになりました。

国府町周辺はリンゴや桃の産地、もぎたてのリンゴを煮つめてジャムづくり、これからは四季折々の果実ジャムをつくろうと思っています。リンゴ、桃、なつめ、木いちごなど、一つ一つが季節を表し、私たちを楽しませてくれることと思います。

さて、もう一つの実りの秋、私の木工品も注文と共に少しずつ腕が上がってきました。「本当かな？」という影の聲が聞こえてきますが、私にも前進があるのです。現在、神田キリスト教会の洗礼盤づくりに追われています。製作日数20日間、これから漆塗装に入りますが、完成まで40日はたっぷりかかります。実に気の遠くなるような仕事で、木工品部門は当分の間採算がとれそうにもありません。

そんなこんな訳で、ものをつくることの喜びと楽しさ、そして厳しさを教えられた「実りの秋」でした。

こうして秋から冬へ、四季はゆっくりと巡って行きます。あぶらむの会が発足して二度目の冬を迎えますが、今年の冬は総勢11名での越冬です。皆様にはこの「越冬」という言葉、少し大げさに聞こえることと思います。実際、ボタン一つで冷暖房が自由になるような都会生活では冬を迎えるための準備など、特別になく、越冬という言葉は死語になっています。しかし、新しい地で冬を迎える私たちには、一冬を無事に過ごすためには数多くの準備が必要なのです。この地では10月中旬から4月までの半年間ストーブをたきます。真冬の寒さは相当なもので、外温 -15°C 、室温 -5°C 、といったような日はザラで、家の中で一番暖かなところは冷蔵庫の中という、ウソのような本当の話になるのです。

この冬期間の唯一の慰めは、薪ストーブとそれを囲んでの団欒です。最近流行の温風ヒーター等はふやけたような暖かさで、暖かさに存在感がありません。その点、薪ストーブには人をやさしく包み込むような強い暖かさがあります。ただ難点は薪集めの仕事の莫大さです。木工所や製材所から出る廃材を夏前から集め、やがて来る冬に備えるのです。薪が沢山集まると自然と顔がほころび、不足すると貧しくなったよう

な気持ちになるから不思議です。そして一年かかって貯えた薪が底をつくころ春が訪れてくるのです。家の中に本当に暖かな室があると思えば、どんな寒さの中にも苦になりません。中途半端でいいかげんな暖かさの全室暖房よりも、一室でいいから



本当の暖かさがそこにあれば、寒さに負けることは決してありません。大切なことは暖房一つとっても一つ々が本物であることだと思います。

もうすぐクリスマスがやってきます。今年
 はあぶらむの里中央の巨大なほうの木に色とりどりの豆電球がとまります。きっと美しく、
 私たちの心をなごませてくれることと思います。クリスマス—イエス・キリストの

出来事は、この世の寒さの中に燃え続ける薪ストーブのように思えてなりません。
 どうぞ皆様、よいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さいませ。
 過ぎし年の恵みに対する感謝と共に新しき年、神の平安が豊にありますようお祈り
 致します。

あぶらむの会代表 大郷 博

お知らせ

「飛驒便り」でご案内させていただきましたように、これまで試作を重ねてまいりましたくん製品とジャムを、あぶらむのオリジナル商品として、皆様にお届けさせていただくことに決心致しました。

食品添加物が私たちの健康に及ぼす害が叫ばれて久しいのですが、添加物食品は増加の一途をたどっています。生産者と消費者が互いに顔を知り、直結した生産、販売体制をとれば、それらの食品添加物は不用であり、価格も低く抑えることができます。

どうぞ一度お試し下さいませ。教会、職場、地域等でグループ購入なさる方には、試食品をお送りさせていただきますので、ご連絡下さい。

ベーコン	100 g	290円
ロースボンレスハム	100 g	390円
スモークタン	100 g	800円
リングジャム	350 g	500円

フィリピン山岳州サガダ村孤児院「聖天使園」よりの便り

皆様にご協力をお願いしている「聖天使園」より便りが届きましたのでご案内いたします。現在は、彼等の生活費として、一人年間3万円、50人分を目標に協力をお願いしています。しかし、私はネパールでの体験をもとに、将来は彼等の自立に向けての援助活動を考えています。この飛驒地は、大工や木工などの、中間技術の豊富なところです。聖天使園の将来を担う若者数名を募り、この地で修業させ、将来、サガダ村で木工所を開き、孤児院の自活の一助にと考えています。

日本のよき友人の皆様へ

愛と喜びと平安が皆様のうえにありますことをお祈りいたします。

皆様からの惜しみないご援助によりまして、教育の機会にめぐまれなかったより多くの子供たちが、学校に通うことができるようになりました。皆様のようなよき友人を得られましたことはわたくしたちにとっても大きな喜びです。子供たちの親は、ほとんどが学校に行くこともなく、田を耕し、米をつくることで生きてきました。そのために、教育には多くの出費がともなうことが、なかなか理解できないようなのです。米をつくり、そしてそれを食べる、それしか知らない、そんなことでは決して十分とはいえません。長年にわたって、わたくしたちのセンターでは、技能開発プログラムを行ったり、小さな商いをしてきました。また、初歩的な保健指導をすることによって、家庭や近隣の健康管理ができるようになりました。

幸いにも、わたくしたちはCCFの援助により、経済的にこれらの活動をささえてきました。しかし、1989年半ばにはその援助がなくなることになりました。自立に備えてわたくしたちは、訓練できる者はできるだけ訓練しようとしています。最終的には地域のメンバーが、彼等自身で活動ができるようにしたいと考えています。わたくしたちは、小さなグループ・プロジェクトをもち、すでに財源を確保し信用組合を運営しています。親たちの中からリーダーを選び、地区委員会がつくられ、健康プログラム、教育プログラム、経済自立プログラム、援助者との交流プログラム等を行っています。

いま祖国で起こっていることは、決してよいことばかりではありません。しかし子供たちは、正しい方向に進ませたいと努力しています。まだ、希望はあります。熱心

に困難を乗り越えて行けば、そして、神様の助けと皆様のご協力があれば、たとえ何年かかろうとも少しずつ改善されて行くと確信しています。

聖処女マリア修道院 院長 マザー・クレア

日本の友人の皆さんへ

皆さんが私たちの聖天使園について知りたがっていると聞いたのでお便りします。私は、このプロジェクトのメンバーになって4年になります。小学生のころから援助を受けてきました。以前はボントックで勉強していましたが、今年からサガダに来ました。



ここでは、少しですが収入を得ようと、豚や鶏を飼ったり、畑をやっています。これらのプロジェクトは私たちの生活を支えています。

私たちは、毎年各施設に分かれます。私は2年間、事務所のあるクンクデゥンというところにいました。今年からは、修道院の中で生活しています。私はここにきてよかったと思っています。どうしてかと言うと養鶏とか養豚が習えるからです。

この前、聖天使園の記念日のお祝いがありました。私たちは、歌や踊りや劇を発表しました。私たちの親もとても楽しんでくれました。しかし今年はCCFからの援助がくる最後の年です。私たちはもっと自立のためのプロジェクトを続けようと思っています。

サンドラ・アノンガス

'89 フィリピン・キャンプ

一人と人とが理解しあうことを求めて、フィリピンの草の根の人々と共に

期 間 '89年2月24日～3月14日

参加費 135,000円（全費用、但し除（渡航手続）

詳細はあぶらむの会まで。

第3回 「公立高校の現場から」

逸見敏郎（高校教員）

私は現在、導きにより教員となって4年目の日々を過ごしている。私の勤務校は本年度創立10年を迎える男女共学の全日制普通科高校である。“偏差値ランキング”なるものによれば偏差値56であり県内では中の上クラスの学校であるという。生徒数は各学年10クラス、計約1400名である。私は現在3年生47名の担任。多くの生徒は明確な目的のないまま進学を志している。

さて、47名もの人間がいれば色々な行動をとるものである。2名の女子生徒は現在不登校状態にある。学校全体で見ても不登校状態にある生徒は、近年になく今年は多く10名弱程いる。なにゆえ生徒は不登校に逐いやられるのだろうか。稲村博氏が「登校拒否は早期完治しないと無気力症になる」という発表をしたのが9月16日。これに対し「登校拒否は自己崩壊から身を守る反応であり学校こそが病んでいる」という集会が11月12日に都内でもたれ、会場に人があふれるほどの盛会であった。しかし、私には両者の主張を聴いてみても、ともに不登校の「なぜ？」に触れているようでいない、隔靴搔痒の感じがしてならない。そこで、この場を借りて不登校に対する現場を通じての私見を述べてみたいと思う。

今は亡き林竹二氏は後半生をソクラテス的手法に基づく授業実践を通じ現在の学校・教育に対し提言し続けた。その記録写真集の中に在日朝鮮人の少年が彼の「人間について」の授業を受ける中で表情や姿勢が変容していくコマがある。少年は林氏が提示した内容を確実に自分のものとするにより自らの置かれている状況を的確かつ客観的に把握し、自分は何をなすべきかを認識したのであろう。知識を得たことがカタルシスになり得たのだ。時として知識偏重への批判には鋭いものがある。しかし、知識を獲得することそのものが罪なのではなく、知識を留保（エポケー）できずに知識だけに頼って物を見る科学主義的な態度が罪なのである。

ところで生徒は自分自身の目を開かせてくれるような知識に飢えているのではないか。受験という暗記テストの枠が高校の場合歴然として存在する。その枠内で生徒自身が自らを問い、いかに生きるべきかを考える機会を持つことはできないのだろうか。私事になるが倫理という授業の中で、私は「自分を知ろう」というテーマで青年心理学や性格論を講義している。自分自身の行動特性や思考・認識の癖を知り、自分を客観視することが目標である。このテーマでも講義時の生徒の表情には普段と違って、

凜としたものが感じられる。生徒が持っている常識的知識の枠を揺さ振り、自らで問い学ぶ授業が学校の中で日常的に行われることが、本来的な“教育の場”としての学校存立の第一歩ではなからうか。

さて、「人間関係の病は関係の中でのみ修復する」と語ったのはフロム・ライヒマンであったように思う。不登校の生徒の世界の眼差しを向けると必ずや人間関係での躓きが目に留まる。家族内の、学校内の関係がどこかでよじれ、それが不登校につながってくるのだ。特に目に付くのは夫婦関係のトラブルを基にした親子関係の綻れである。親は自分自身の延長線上に子供がいると、誤って認識し子供を自らの味方として取り込もうとするところで親子の癒着が生まれてくるのである。この関係の綻れを糾し新たな親子関係を作り上げることが、不登校の生徒が自らの人生を、自らの脚で前向きに歩むために欠くことのできない事であると思う。私が両親に対し夫婦の関係を、子供の存在を、再認識するべく語ったり生徒に対して両親とのコミュニケーションのありかたを再確認するためにロール・プレイを行ったりすることも少なくはない。

関係をきちんと持つ。ということは易しいようでいて難しいものである。特に飽食の時代と称される現代においては、子供達は多くのことが自分たちに準備されていて当たり前とされるためか、相手の立場に立って考えるということがなかなかできない。そのためだろうか、友人関係も場当たりのなものなのである。このような事も考え併せると、存在の不安に打ち勝つような真の強さを持った自我を育成することも学校教育の中において、今日求められているのでないだろうか。

精神医学的にみても病理現象として不登校が見られる場合もある。この場合は適切な医療機関との連携の下に生徒を見守る必要があることは言うまでもない。しかし、多くの生徒は彼らを取り巻く世界を整え、かつ彼ら自身に新たな視座を持たせることにより、自分自身を取り戻せることが可能であると思う。

紙幅に対し内容が広がりすぎ、かなり乱暴な記述となってしまった気がする。最後に、今日の学校及び教員の果たすべき役割は、かつてのそれとはかなり様相を異にしていることは事実であろう。しかし、実際のところは保守的な雰囲気の高い学校現場においては、なかなかこの事実を前向きに認識できず管理的にふるまったり、権威を自立する時に上げる魂の叫び声を聞き分け、教員としてできる援助を的確にしてゆきたいと思う。



『共に在ること』

司祭 河野 裕 道 (池袋聖公会)

「幽霊(お化け)と仲良くする会」というグループがあると、ラジオで聞いたことがあります。詳しいことは知りませんが、この会では、お化けが出やすいようにと、木立や池など静かな所を守る活動をしているようです。自然保護活動と結びつく働きです。会のもう一つの主旨は、我々にもやがては「あの世」に行くのだから、そこに詳しい人と知り合いになり、仲間になっておくことは、あの世での生活にとって益となるというものです。この世は、それ程に自然破壊が進み、経済的な仕組と豊さを追い求めている私達への警鐘であり、そこにユーモアをもって立ち向かおうとする切実な願いを感じます。更には、利用できるものは何でも取り込み、他人をも道具化してしまう我々に対する皮肉も込められているのかも知れません。幽霊をも利用せよと。この地球上にある全ての物資を思うがままに消費し、再生不能の資源があることに目をつぶって進んでいる消費文明の圧倒的な力の前には、ユーモアなくして争うことが出来ないのかも知れません。

大郷先生とは、かれこれ15年程のおつき合いになります。いつも彼からは新たな気づきを与えられて来ましたが、共に人生の旅路を歩む者として、支え合う仲間として、人々を受け止める温かさと真剣さが、ハッとさせられるのでしょう。大学と教会の組織の枠組をはずれて、飛騨高山へ旅立ち、木工訓練をはじめた時には、管理社会の唯中にいる私には驚きを覚えたものです。国府町のお歴々の心を動かして、土地を取得、十字架や洗礼盤を作り、木屑の香りを嗅ぎながら、ベーコンやハムを燻している彼の姿を想い浮かべると、ユーモラスな感じを受けるのです。田植えで泥に漬かり、収穫の束を前にして安堵している彼の笑顔は、無心に写って来ます。この大地を造られ、自然の中に人間を置いて、その創造の業に参与させて下さった神を讃めたたえているような寛ぎを感じさせてくれます。

東京の中でも、ここ池袋は社会の矛盾の中で、落ちこぼれ、貧しさと苦悩に打ちのめされながら生活している人が多く集まって来る所です。その日の職に溢れた者、せっかく働いても、騙され、ピンはねされて空しく帰って来てしまう人々が駅や周辺の公園で夜を過ごします。遅くまで飲食店で働く女性たちが、心身をすり減らし、狭いアパートで疲れた体を横たえています。都会の騒音と生活のリズムは、そんな人々を気にも止めずに、過ぎ越していきます。そんな街中の一角に「小さき姉妹の家」と

＊
いう修道女の住まいがあります。仕舞屋風の家とアパートが建ち並ぶ唯中のその住まいには、3人の修道女が、周囲の人々と同じような生活を送っているのです。フランス人の有名なシャル・ド・フコー神父が提唱した修道会で、その地で最も貧しい人々と共に生活することを実践している小さな集まりです。そのうちの1人は、サンシャインビルの地下にある社員食堂で賄いとして働いています。食堂の経営者は、利用者が増えて、忙しくなっても、働く人は増してくれなくてと嘆いていました。もう1人は、近くの病院で掃除婦として、相当キツイ労働をしています。この「小さな家」の生活費を稼ぎ出すためです。残りの1人は、常時「家にいて、訪れる人々の話し相手になり、家事をするというのが修道女たちの日常生活です。玄関先には、泥について大根が置かれていました。周囲の人々と同じ場に自らを置いて、働き、生活すること、そのことがキリストに従う道であり、人々のうちに秘められ、苦悩している具体的な思いが、よく見えるようになって来ると言います。失業した人と一緒に職安にお伴をすることも度々あるそうです。係員の無神経さと冷たさに、何とかならないものかと溜息が出てしまいますよと語る。彼女らの疵口を平気でグサリと突いて来るんですからと。色々な施設があるんですが、彼女達を立たせ、元気づけて行ける所は、ほんとうに少ないですよ、と語る修道女の言葉に実感が込められていました。私が訪れた時も、若い女性が遅い昼食を食べて出ていく所でした。一人で食べるより、ここでといてよくやって来るのだそうです。入れ代わりに、保育所の預けた子供を連れた婦人が座り込んで、ゆっくりと寛ぎながら、お茶とお菓子を食べていきました。時々、精神的に不安定になることがあるお母さんなのだそうです。ここでは、祈りを共にする以外、特別なプログラムは持っていないとの事です。正に、この地域に存在することをもって、信仰の証しとし、キリストに従うこととしているのです。あるがままを受け容れることができるように願っているようでした。今、彼女達が具体的に願っていることは刑務所の中で女囚の人々と同じように生活することだそうです。規律と訓練を押しつけて更生を図ろうとする日本の刑務所では、その願いは到底実現しそもないというのです。人間を管理し、規範を強要する社会が、刑務所の在り方に象徴されているんですねと鋭い指摘がなされました。……企画もせず、人集めをするでもなく、只管貧しい人々、苦難を負った人々と共に在り続けようとする彼女達の住まいには、真の平安と人を勇気づける力が溢れています。

救いの主の誕生を祝うクリスマスが近づいて参りました。聖書が証明する救い主は、貧しい人々と共に在り続けようとする神の愛を生きる方であります。当時の世界が、ローマ帝国という大きな権力につつまれて、身動きが出来ない中で、ベツレヘムの寒村の馬小舎で誕生された救い主は、その象徴でありましょう。星の導きに従った博士

達、羊を飼いつつあの馬小屋に馳せ参じた羊飼、天使の歌声の大合唱——が美しいと感じさせてくれるなら、それは、一人の貧しい人々と、そして私たちと同じ道筋を歩もうとされる神の愛が、その根底にあるからに違いありません。人類の救いという大事業は、寒村の片隅に実現し、その業が継続しているのです。そのことを見出し、感じとり、自らの希望として生き続けることが出来る者は幸いであると聖書は語っています。

後援会事務局だより

早いもので、あぶらむの里建設募金を開始して、1年が経過しました。この間延べ900名近い方々から募金をいただき、募金総額も1700万円に達しました。後援会事務局の一人として心より感謝を申し上げます。

大郷先生が立教大学のチャプレンを退任され、故あって聖公会も休職されたのが3年前。飛騨高山の木工訓練学校における1年間の充電期間の後、あぶらむの里候補地を見つけられ、実現へ向けてその具体的活動が始まりました。

大郷先生が立教大学在任中から、あぶらむの里の構想については、よく聞かされていました。その当時は、まだ漠然としていただけに、却って“そんなことが実現出来ると素晴らしいだろうなあ”と夢見心地だったのですが、いざ具体化となると、金なし、物なし、人なしの無い無いづくし。あるのは、限りない夢と情熱ばかりという状態で、不安ばかりが広がっていきました。建設募金趣意書を作成するための会合で、この計画が完成するのにどの位の費用が必要なのか尋ねたところ、“一億円”という返事が返ってきました。その途方もない金額に、一同しばし茫然。“この男は一体何を考えているのだ”という顔で、大郷先生を眺めていたものです。

しかし、大郷先生の回りに集う人間達の中には、変人というか、素晴らしいというか、何と表現してよいかわからない人間が多く、その時も、ある人が一言“神様は人間にとって必要なものは、必ずお与え下さるものです”。この言葉に騙され(?)というか、この言葉だけを頼りに、先ずは、一年間で3000万円を目標額に設定し、出発したわけです。

募金趣意書の作成、発送者リスト作成、世話人の依頼などを慌ただしく済ませ、昨年11月29日に発送を完了しました。先ず驚いたことは、大郷先生の交友の広さです。発送者は、1600名にのぼりましたが、一人の人間が何らかの形でこれだけの人々と関わりがあるということは、何と素晴らしいことでしょうか。

発送後、毎日のように振込通知が届き、“今日はどうなたから来ているかなあ”と楽

しみにしながら帰宅したものです。あぶらむの里建設のための募金が集まってくるこの喜びは当然のことですが、あぶらむの活動が多くの人の暖かい気持ちに支えられこの輪が広がっていくことに大きな喜びを覚えます。このあぶらむ通信の発送部数は2000部を越えます。この一年間に新たに400名の方々にこの輪が広がりました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

募金も目標期限まで3ヶ月を残し、あと1300万円で目標額に達します。これからも、“神様は人間にとって必要なものは必ずお与え下さるものです”という言葉を頼りに、事務局も頑張っまいますので皆様のより一層のご協力をお願いいたす次第です。

(事務局 西田邦昭)

12月1日現在の募金の申し込み総額及び振り込み総額は以下の通りです。

申し込み総額 1,831万7,420円

振り込み総額 1,717万9,234円

※送金先 郵便振替 東京7-255427 あぶらむの会後援会

銀行振込 第一勧業銀行池袋西口支店 190-1434235

あぶらむの会後援会 代表世話人 八代 崇

事務局 〒182 東京都調布市染地3-1-373 西田方

TEL 0424-82-2051

○12月1日現在の募金申し込み者(順不同・敬称略12月1日以降の方は次号にて)

聖マルコ教会 聖ルカ礼拝堂 島田信弥 沢田京子 黒井ミヤ 池田寿美子 阿久津富男
田島クニ子 聖パウロ教会 大場秀太郎 大野浩司 高崎健一・由理 阿波野弘子 伊藤友昭
飯島豊彦 平井正城 坪野谷雅之 柳原光 菊澤満喜子 城下彰 金沢良信 手塚京子
篠田克雄 新田和子 中村清 大和田勝 石川真安 伊藤ミドリ 高坂征男 高橋敦子
一丸直也 岡登正子 祈りの家教会 和田八束 田宮裕 林英夫 日下初子 滝沢助蔵
具志堅興永 西沢浩 久世治靖 藤倉待子 武澤信一 田中幸治 森田トミ 小宮山眞市
堀内昭 筒井啓子 山本博幸 北野春子 舟田正之 米山覚 岡本伸之 永森清保 等農光人
鈴木博士 菊地純子 中村正実 永田寧子 橋本久 楡原伸 興石勇・千英乃 成井恵
W・F・ハナマン 福山清蔵 宮城正男・正子 塚田道生 鈴木佐和子 大嶺佐智子 山本照子
松岡和夫・ハル子 東京セント・ポールズ・ライオンズ 吉村茂男 丸山恵司・悦子 藤田知介
桑山道子 藤田史明 武田恭一 波多野春子 本田リン 大橋忠雄 末積優司 小林加枝
下田幸子 甲藤善彦 木村節子 熊谷一綱 高橋清子 室田進 相沢牧人 尾針明宏・恵子
糟谷珠子 高田建夫 佐藤一宏 深野毅 星野一朗 桂英隆 高瀬由香 吉村久美 矢部直美
深谷麻子 広瀬勝也 鶴川久 湯浅貴子 中村洋 高橋和子 新倉俊子 寺西裕子 川上美砂
小川卓 萱間隆夫 市川聖マリア教会 斉藤宗夫・有美子 大脇一生・昌子 下地恵純
長間四郎 五反田良蔵 山下勇 川田多喜雄 田中昭茂 藤木良治 船坂泉 下畑寿三